

いよいよ三学期が始まりました。保育や教育現場では、新型コロナウイルス感染拡大防止対策がとられる中で昨年の6月から様々な工夫がなされてきました。基本にあるのは「命を守る」ことです。大人も子どもも、不自由さや不安を感じながらも、小学校では学びを保証すること、保育の現場では日々の保育の充実を図ることなどの努力を続けています。そして何より、人とつながることの大切さについて、改めて見直されているのではないのでしょうか。今号は、昨年11月・12月に開催された合同研修会の様子をお知らせいたします。

## 第1回幼稚園教諭・保育士合同研修会（11月26日 池上会館にて144名）

### テーマ「子どもが夢中になって遊びこめる保育環境」

早稲田大学 人間科学学術院准教授 佐藤将之先生をお迎えしました。コロナウイルス感染防止を考慮（ソーシャルディスタンスをとり席の確保、消毒の徹底）する中、特に「換気」を考えてほしいとのことで、空気の出入り口を確保する、壁にある排煙は開く、エアコンをつけても換気にはならないなどアドバイスがありました。

環境について、「心を育てる保育環境」の映像を見ながら様々な角度から掘り下げる講義となりました。環境は保育を考えるきっかけになる。日々の保育の中で、例えば、「子どもが保育室を走り回り、集中して遊びこめない」ことが問題なら、子どもの動きを捉えて、集中して好きな遊びがじっくりできるよう、衝立を作って保育室を仕切ったり家具を可動してコーナーを作ったりして、生活と遊びのゾーンに分けることもできる。衝立はダンボールなどで作り、当たっても危険のないようにする。また、そこを使う子どもの年齢に応じ、子どもの身長や座ったときの高さなどを測り衝立の高さや幅を決めていく。試しにやってみて、子どもの様子を観察し、効果や問題点を抽出し、またやってみる。少しずつ修正しながら繰り返してみる。とりあえずやってみることが重要。子どもの「思いと環境をつなげること」を心がけていくことが大切。衝立で仕切った場所は、子どもが落ち着かないときやケンカをして気持ちが沈んでいるときにも活用できる。



三密を避けた会場の様子

海外の工夫として、照明を少し落とすと子どもが落ち着くことから、昼食や午睡に取り入れたり、天井や窓に布を使い天井を低くしたりすることも紹介された。（なお、防災面を考慮することも大切とのこと。）また、園庭の環境づくりで花や野菜を育て、虫探しができれば、子どもたちは自然と触れ合う中でいろいろな発見をし、試行錯誤して環境づくりをすると子どもたちは夢中になって遊び、豊かな経験ができる。保育者も保育が楽しくなるので、プロセスを楽しん

でほしいというお話でした。

#### 家具や衝立の高さを揃えて、コーナーを作った例

座ったときに隣のコーナーが見えないことを意識して、家具や衝立の高さを揃えて布で覆ったしつらえ（保育者は見渡せ、子どもの様子わかる。）



#### 様々な人を巻きこみながら環境設定を行った例



父親参加、蟬取り椅子  
作りの様子

【環境づくりのプロセス】 気になる場所があったら・・・

- ①とりあえずやってみる→ ②観察する→ ③効果や問題点（課題）を考える。
- ①②③のサイクルを繰り返していく = “スパイラルアップ” の考え方で、保育環境を少しずつ修正し、各園のテーマ（目的）に合うように築き上げていく。

【参加者の感想から】 保育室の光・音・空間の工夫が大切だと感じた。環境設定に悩んでいたのが解決につながってほしい。狭い環境でも「やってみよう」と思える実践例があった。「仕切り」を使うのは良い方法だと思った。環境を整えるために何を揃えようかだけでなく、なぜ必要か、どうやろうかと話し合いながら考えていくことが大切だと感じた。